

## A21a 光赤外将来計画の策定について

家 正則 (国立天文台)

すばる望遠鏡や ASTRO-F に続く次世代の光赤外天文学装置計画について、本企画セッションの各講演に見られるように、さまざまな構想やアイデアに基づく光赤外コミュニティでの本格的検討が始まった。光天連の議論を受けて発足した光赤外天文学将来計画検討会（仮称）では、すでにサイエンス／理論検討班、地上超大型望遠鏡検討班、次世代スペース望遠鏡検討班の三班を組織し、具体的検討を始めている。今後約一年をかけて具体的青写真を提示する方向で精力的な検討を進める予定である。 予算規模などから国際協力を推進することが不可欠と思われるが、小回りの効く我が国独自の計画を追求する可能性や、機関個別の計画とのバランスをコミュニティとしてどう考えるかは、十分な議論を経て実施する必要がある。 大型計画の場合、サイエンス、技術両面での検討に加えて、国立大学や共同利用機関の法人化を控え、次世代計画は我が国の光赤外コミュニティ全体で支える計画として、法人間の壁を越えた協力体制を整えることが不可欠であろう。コミュニティでの議論、天文研連等での検討を踏まえ、内外の状況を見極め、長期的な展望をもって、迅速な意志決定をできる体制を整える必要がある。 これらの問題への取り組み方について提言し、意見交換したい。